

田生

生田地区の新しい図書館はほぼ完成している。夕日色の建物は山図書館とは比較にならないほどスマートで、ヒマラヤ杉の濃い緑が美しく反射する。農学部第三校舎も八月の完成期を前に着々とその骨格を築きつつある。学生の姿はボツボツ、ボツボツしか見受けられないが、工事だけは果敢なく進行している。

農学部第一校舎の正門入口に、「三里塚遊藝場」のプラカドがある。

先月二十九日、三里塚遊藝場は地権者の状態を確認し、そして宇治友対同盟の戸村一村委員長に会い、(中略)農学部を通して、連携することを約束してきま

した。(中略)農民が何故に鎌を振りあげても闘うのか「農学」というものは農民から離れて存在しない。三里塚はそれを教えてくれるいちこそで学び取らなければならない。

三里塚へ農業実習

「開かれた大学」の実践

側新聞を

側新聞を

第一班の農経二の一、二の七人は七月五日に出発一週間農業実習を身体で経験し帰ってきた。「開かれた大学」とはブルジョアのためのものではなく、全存在をかけて権力と闘っている底辺にこそ開かれるべきである、というのが彼等の考えであり、それを実践したものが今度の三里塚実習である。期間は一週間であるが、九月まで入れ代り立ちの続々と遠征隊を送り込む予定である。交通費は駅頭で集めたカンパで間に合うが、食事代は一日基本的には二五〇円という。向うに着いたら二、三人ずつ各履も……」と扉板が呼びかけていた。

家に振り分けられ、泊り込む。働いてやるのだから食事にはタダでも、と思うかもしれないが、一度は生活をしながら闘かっている。決して経済では無い。食費ナシという事は、彼等の闘争に対する経済的破壊へのつながりとして、自費出費しているという。

生田地区共闘は七日、「七夕・パリ祭」を聞いた。一年一度の夜を革命的に、というフレコであった。映画もやった。毎日「農原作の十三夜」、「にこにえ」の他、「三里塚の夏」などマジメな企画。

農闘委の各クラス闘争委の部屋は「闘争にくらべ落書がハンショウしている。見かける学生数も多い。窓側に新聞を

一 キャンパス見下す記念館で今日もアジッてピラを配る 徹夜疲れの真赤な日は俺のもの そう俺のもの 二 流れ流れて和泉にきたさ 三里塚ぶりのあの娘に会った パクられパクられて心配かけた あの娘だけに頭が下がる 以下省略

歌謡曲あり、詩ありであるが「闘う女性同志の御室です」にはビックリした。あるクラスには「肺結核療養のため、心ならずもわれわれの戦列を去ったT君の住所を右に記す。各自意のある者は手紙で

!! S !!